

全海運所属組合の横顔

連載 第6回

九州地方海運組合連合会

その9 壱岐汽船海運組合

【壱岐汽船海運組合の概要】

事務局 〒811-5214

長崎県壱岐市石田町印通寺浦目坂 471-4

電話 0920-44-6130 FAX 0920-44-5661

印通寺港より徒歩2分

理事長 岡村 安一郎 大福汽船(有) 代表取締役

事務局長 竹松 孝雄 専務理事

事務局員数 男子2名(事務局長含む)

女子1名

組合員数 運送業専業者 1社

貸渡業専業者 11社

貸渡業運送業兼業者 1社

合計 13社

所属船腹量 一般貨物船 13隻 4,159 総トン 13,755 重量トン

油送船 2隻 784 総トン 1,864 m³

合計 15隻 4,943 総

トン、15,619 重量トンm³

【地区組合事情】

壱岐汽船海運組合の事務局は、壱岐島南部の石田町の印通寺港の目の前にあり、唐津行のフェリーがここから発着している。事務所の敷地は町から借りているが、建物は組合員の出資で持ち家。壱岐汽船海運組合が入居していたところに壱岐内航海運協業組合(3号運送業)の事務局が設けられた。組合員は協業組合にも加盟していたので、この点では壱岐地区海運組合と同じだが、①所有船腹が許認可基準を満たすのに厳しくなって来たこと②オペレーターとして荷物を斡旋することが困難となって来たこと、③壱岐の砂・土・砂利の採取量が減ったこと、などが要因となって協業組合は運送業としての許可基準が充足出来なくなり、平成7年(1995)6月に解散した。

壱岐島では、石田町に昔から海運業者が多く、現在でも島内の約9割の海運事業者が石田町に集中している。壱岐汽船海運組合の組合員は、かつて壱岐地区海運組合



岡村理事長(左)と竹松専務理事



壱岐汽船海運組合へのアクセス
(Google 地図)



印通寺港

に加入していたが、組合首脳が船の新造や売買、用船料などについて、経営改善の面からアドバイスする方針に抵抗があるとして、昭和42年(1967)12月に組合員が離脱し、壱岐汽船海運組合を設立(43年1月認可)した。

令和2年(2020)8月25日現在の組合員は運送業専業1社、貸渡業専業11社、運送業県貸渡業1社の計13社で、所属船舶は15隻、4,943総トン、15,619重量トン・m³。船種別にみると貨物船13隻、4,159総トン、13,755重量トン、油送船2隻、784総トン、1,864m³である。所有船が2隻あるのは2社だけで、他は一杯船主。家族船員の形態も多い。

古くからの地元事情に詳しい田中原治幸栄海運(有)会長(元壱岐汽船海運組合理事長)によると、印通寺港は古くから大陸交通の拠点港としての位置づけにあり、江戸時代には壱岐の上納米などを千石船で積み出していた記録もあり、海運業が盛んな土地柄。漁場の対馬海峡まで遠く、漁業には不利な点もあることから、内航海運への進出が盛んになった。昔は対馬の木炭、白土、壱岐の葉タバコ、米、小牛などを九州などに輸送し、帰り荷として生活物資を運んだという。

印通寺周辺の手運事業者が木船から鋼船化に取り組んだのは、昭和35年(1955)頃から40年代前半までで、組合発足の時点では他の地区に先駆けて鋼船化が進んでいた。大半の組合員は元々協業組合の主力貨物である砂・砕石、飼料、雑貨、木炭、木材や生活物資の輸送を中心にしてきたが、近年は協業組合に代わり九州、阪神地区のオペレーターの支配下に入り鋼材、飼料、砂・砂利などの産業物資の輸送に切り替わっている。

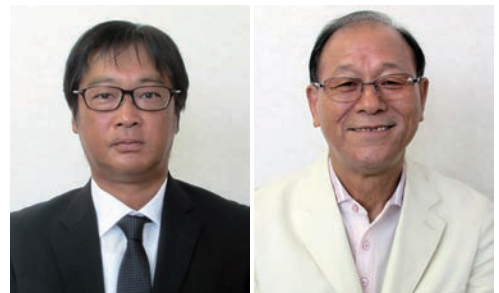
同地区でも後継者難、船員の高齢化から近い将来が心配されている。西本哲也副理事長(八起丸海運(有)専務取締役)が中心となって地元若手船主達は「壱船会」を設け、他地区とも連携して内航海運と船員職業のPRに努めるなど、積極的に船員対策を推進している。

壱岐汽船海運組合では、全海運や運輸局関係の事務手続きや情報伝達の他に、大半の船主が船に乗っていることから、組合事務局が資金調達の手配、適正運賃・用船料の確保などの業務も代行している。また、正月の2日にはとほろ帰りする船主が集まり、海上安全祈願をしているのも古くからのしきたりである。

壱岐汽船海運組合の事務局は、竹松孝雄専務理事と下村純子さん、伊佐藤昌彦氏の3人。



壱岐汽船海運組合の建物(上)と事務局



西本副理事長(左)と田中元理事長